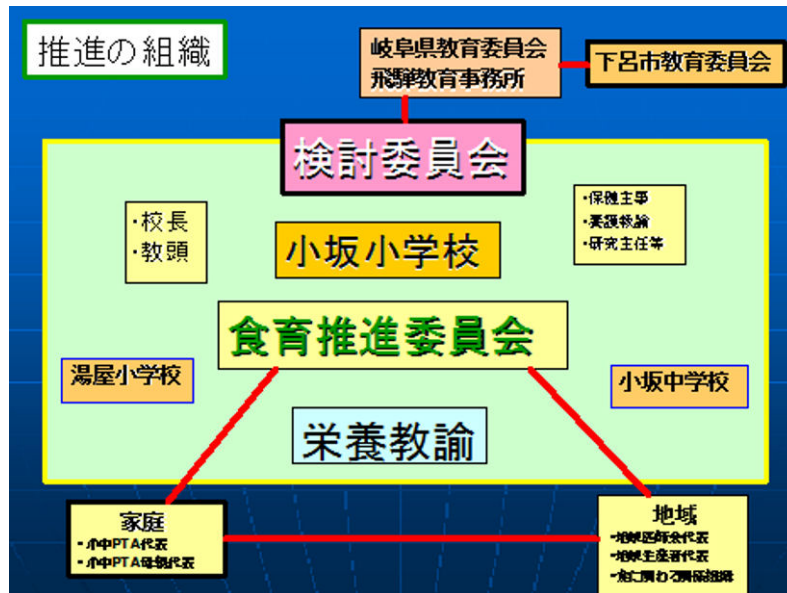


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	岐阜県
推進地域名	下呂市小坂地域

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科における食に関する指導の充実のための取組

- ① 下呂市の食育指導計画によって小中9カ年を通した指導を継続している。学年により学活・家庭科・保健体育で行っている。
- ② 食に関する指導の全体計画及び、各学年ごとに年間指導計画を作成し、各教科において横断的に食育を意識して指導を継続している。

例：1, 2年 生活科 3年 国語…「すがたをかえるだいでず」「食べものはかせ

になろう」社会…農家の仕事 4年 総合…川博士になろう 国語…かむことの力

5年 家庭科 社会…わたしたちの生活と食料生産米作り 6年 家庭科 総合…ようこそ先輩

理科…動物のからだのはたらき 保健体育…生活の仕方と病気の予防 など

- ③ 野菜栽培等の体験や「食」に関する学習を通して、食べ物や生産者や、食事を作ってくれる方に対する感謝の気持ちを育てるとともに、望ましい食生活や自らの健康管理ができる力を身に付けさせる指導を行っている。また、地域講師を招いて食の大切さだけでなく、願いなども理解できる場面となった。

- ④ 給食時間の栄養教諭による訪問指導
「給食は生きた教材」として取り上げ3校へ定期的に訪問し指導に当たった。

- ⑤ ペア歯磨きの継続的実践

- ⑥ 委員会の活動と学校での食環境作り



テーマ2

学校と家庭の連携による食に関する指導の充実のための取組

- ① 食生活実態調査を実施し、児童生徒や保護者の「食」に関する課題を把握・分析するとともに、改善のための具体的方途を明確にし、指導に生かした。
- ② 各PTAにおいて活動重点の一つに「食育の推進」に関した項目を入れ家庭・地域全体で進めることができた。
 - ・「早寝早起き朝ごはん」を合言葉に推進
 - ・PTA便り(食の項目を設定：年3回)
 - ・食育標語、食育ポスターを募集し、作成配布
- ③ PTA学級委員会等の活動との連携を図り、給食試食会や食育講座を実施することで、児童生徒や保護者の「食」への興味・関心を高め、望ましい食生活や健康に対する認識を深めた。
- ④ 親子料理教室 (実践例)
 - ・歯によいおやつづくり
 - ・野菜を使ったおやつづくり
 - ・おせちづくりに挑戦
 - ・地場産物を使った料理教室 など
- ⑤ 一家庭一実践 (実践例)
 - ・親子でおはぎづくり
 - ・兄妹で夕食づくり
 - ・稲刈りの手伝い
 - ・家族揃って朝食を摂る



テーマ3

学校と地域との連携による食に関する指導の充実のための取組

- ① 地域住民や関係諸機関から講師として招き、学級園における作物栽培の指導・支援や「食」に関わる講話(出前講座)を設定した。食に関する願いや生き方を学ぶ良い機会となった。
 - ・養殖業者の講話(魚の生産者代表)
 - ・小坂町における行事食や伝統食
 - ・「地域食材」講話
 - ・野菜生産者の講話
 - ・地場産物工場見学
- ② 学級園等で収穫した農産物を使って収穫祭等を開催し、地域住民と一緒に調理したり、食したりすることで食に対する意識が高まった。
- ③ 食に関する積極的な啓発活動を行った。
 - ・食育通信の発行
 - ・PTA便り(食の項目を設定)
- ④ 地産地消を推進した。給食週間に地域の生産者や講師を招き感謝の会を行った。
- ⑤ 中学生の職場体験学習を実施した。(地域の食にたずさわる職場)
- ⑥ 子ども会活動に取り入れた。(夢プランで郷土食の講座)
- ⑦ 地域講師による夏休み親子料理教室を実施した。
- ⑧ 食育に関する啓発用パンフレットを作成・配布した。



テーマ1～3に共通する具体的計画

□アンケートより実態把握

1. 朝食は、ほとんど食べているが、主食だけという子もあり食事内容に問題があるため、今までの自分の朝食プラス1品目を目標にする。
2. 寝る時間が遅い・睡眠時間が十分でない・毎日排便のない子がいるなどに対し、「早寝・早起き・朝ごはん」で生活のリズムを整えることから始める。

□先進校視察より

1. テーマ設定において
 - ・3つのテーマ(教科、家庭、地域)を設定することの重要性を再確認する。

□地域講師等との関わり

- ・授業へのゲストティーチャーとしての参加や、苗植え・料理教室等の講師として活躍してもらう。
- ・地産地消の推進により、思いやりや感謝の心を育てる。

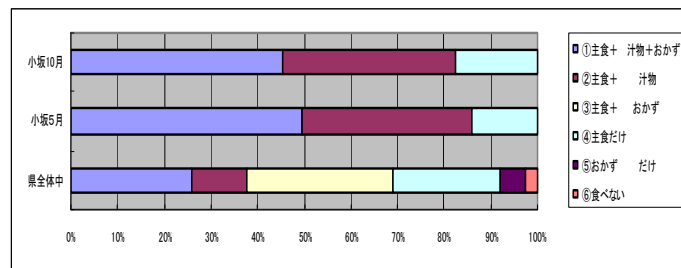
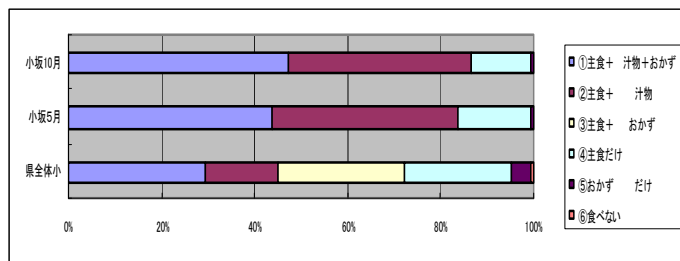
数字で変化のあった事項について

成果と今後の方向

成果は以下の通りである。

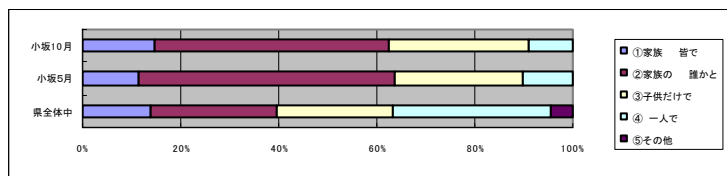
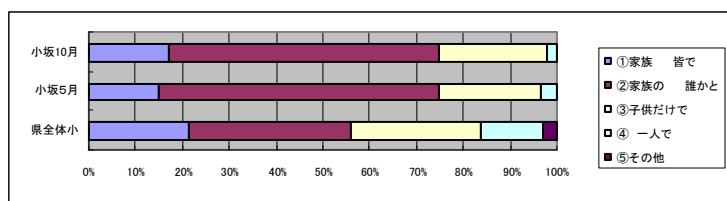
○今までの朝食にプラス1品目を目標にすることで、朝食内容が少しずつよくなった。

- ・主食・汁物・おかずを食べてくる児童生徒が44%から48%になった。
- ・夏休みと冬休みに行った朝食調べでは、朝食に赤、黄、緑の3色がそろっていた児童生徒は、夏休みが53%だったのに対し、冬休みは、66%に上昇した。



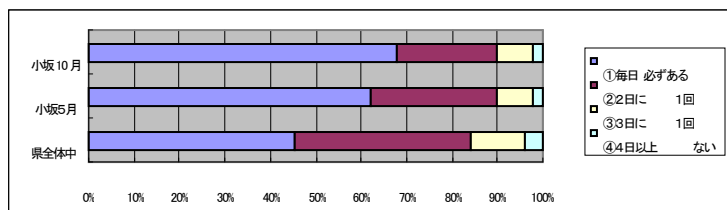
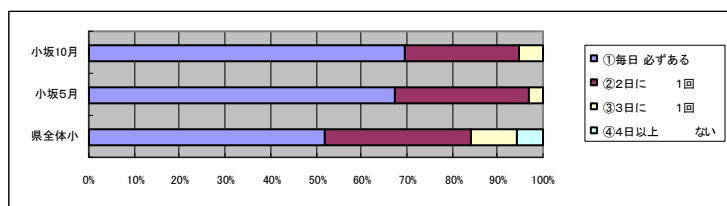
○早寝、早起き、朝ごはんを推進することで、家族と食事をともにする家庭が増えた。

- ・孤食（一人・子供だけで食べる）の割合が、県平均を大きく下回っていた。
- ・地域柄、勤めや高校の通学の関係で、なかなか家族全員で食べることは難しいが、家族みんなで食べる家庭が2～3%ふえた。



○児童生徒の生活習慣の改善が図られた。

- ・毎日、排便できるようになった子が増えた。夏休みと冬休みの調査では、毎日排便した児童生徒は、夏休みの53%から、冬休みは65%に上昇した。



事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

1. 子どもたちの食意識が高まると共に、家庭における食の関心が高まり、各家庭での取組が始まった。
 - ・児童生徒と調理をする家庭が増え、冬休みには、多くの児童生徒がおせち料理づくりのお手伝いをした。
 - ・好き嫌いの多かった児童生徒が、自ら進んで食べようと努力する姿が見えてきた。
 - ・外で元気よく遊ぶ子が、多くなった。
 - ・午前中の授業への集中力が増した。
2. 地域の産物や生産者とのふれあいにより感謝の心をもたせることができた。
3. 地域講師による授業参加により専門的な知識や食べもの作りの大切さをわからせることができた。
4. 生産者やそれに関わる人の苦労や生きがいを学ばせることができた。
5. 指導する教職員が「食育」に対し関心を高めるとともに、日々の生活場面において食育の大切さを子どもに伝えることができた。(学級通信、教科授業、行事等)

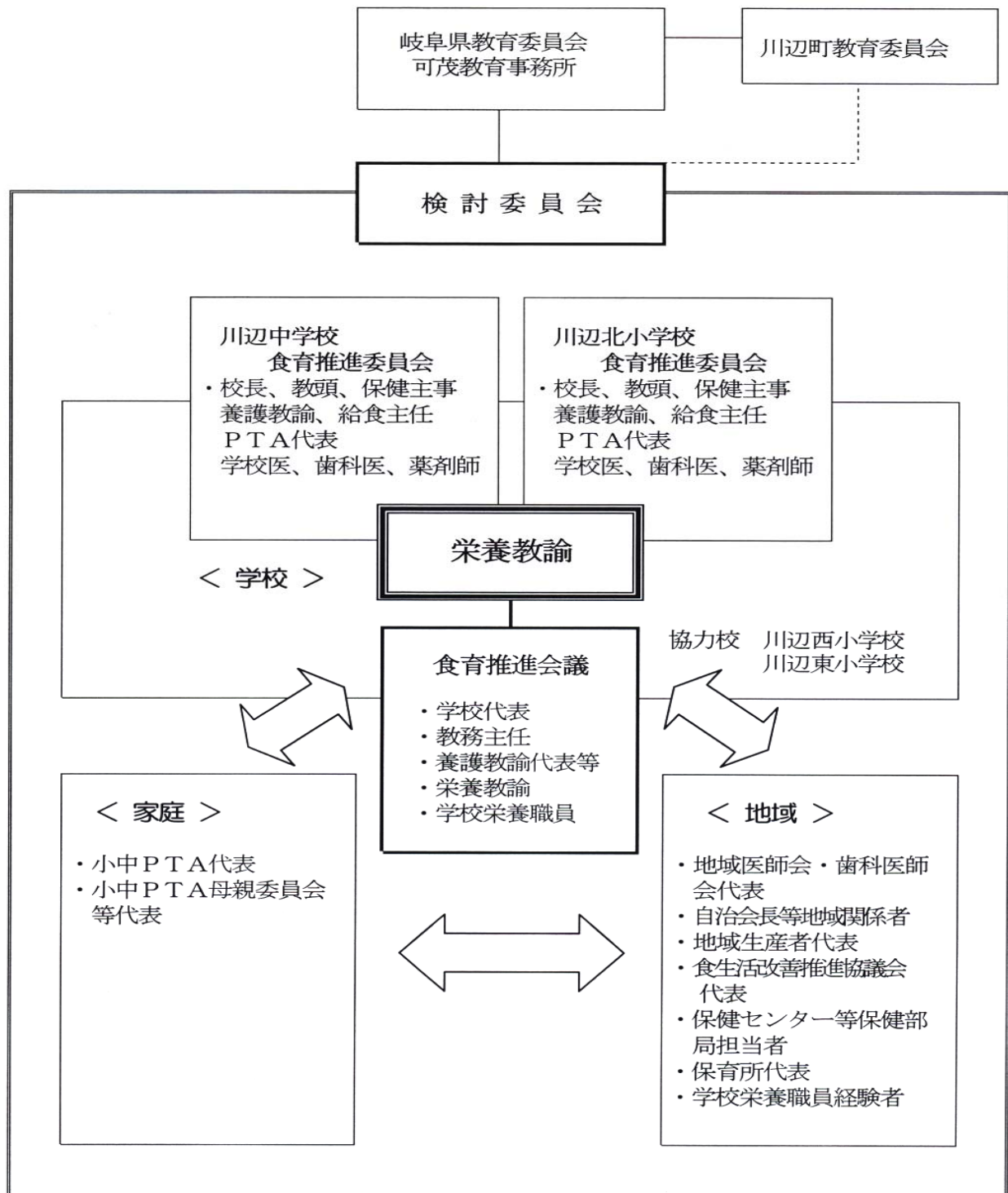
今後の課題（今回の事業により新たに見えた課題など）

1. 食育は、全ての教科、体づくりの土台であり、継続して指導をくり返す事が大切である。
2. 家庭の教育力が問われる中、特に基本的な生活習慣の見直しが必要な家庭も多くなっていることからより家庭への啓発が必要である。
3. PTAの取組として継続することが大切である。

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	岐阜県
推進地域名	加茂郡川辺町

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科や特別活動等における食に関する指導の充実のための取組

(1) 学校の教育目標のもと、食に関する指導の全体構想及び年間指導計画に基づき、各教科と特別活動（学級活動）を関連付けた意図的、計画的な指導を行う。

「食」という一つの柱を通した指導になるように、各教科や特別活動等のそれぞれの関連が図られるよう考慮して全体計画を作成した。さらに、食に関する題材の開発と指導の工夫に取り組んだ。

学級活動においては、栄養教諭ならではの専門的な知識とアイデアを取り入れ、視覚に訴える資料や調理器具の大きさを実感できる具体物の提示、体験活動の工夫の位置付け等指導の工夫を行った。それによって子どもの興味・関心を高めることができた。

小学校2年生学級活動題材名「すききらいなく食べよう」では、栄養教諭の生の声を聞くことで、給食の調理に携わる調理員さんの「給食をおいしく食べてほしい」「好き嫌いをなく食べてほしい」という願いや思いに気付くことができた。食に関する指導における栄養教諭の関わりが、栄養のバランスを考えて、元気な体をつくるために好き嫌いをなく給食をたべようという子どもたちの意欲を高めることにつながった。



(2) 給食の時間や朝の会・帰りの会での日常的な指導を意図的、計画的に行う。

給食の時間に、日々の給食を生きた教材として、望ましい食事について指導した。旬の野菜を直接見て感じる「食についての豊かな体験」を積み重ねることによって、生涯にわたって健康で楽しい生活を送ることができると思う。

今、子どもたちがかかわることのできる豊かな体験とは、「食べたいもの、好きなものが増える」「友達や先生と一緒に食べることを楽しむ」「いろいろな体験を通して、わくわくしながら食べ物に触れる」「食べ物や体のことを話題にする」ことであるととらえている。

4月には「たけのこを使った献立説明」を実施した。用意した大きなたけのこを調理員が子どもたちの目の前で掘り起こす演技に、子どもたちは目を輝かせた。これにより食材についての関心が高まった。



テーマ2 学校と家庭との連携による食に関する指導の充実のための取組

(1) PTA母親委員会の活動と連携し、食育講演会、親子料理教室、給食試食会及び講話等を実施することで、子どもや保護者の、野菜を取り入れたバランスのよい食事など正しい食習慣を中心とした食への関心や意識を高める。

家庭教育学級において「食」に関する講座を行った。小学校では子どもの給食の様子を参観後、朝食の重要性について視覚に訴える多様な資料を用いて講話を行った。保護者自身の食生活を見直すことが大切であることと、保護者の食習慣が子どもに伝わることを強調した。また、家族全員で楽しく食事をする、食に関する子どもと一緒に楽しく行うことが大切であると話した。

初めは栄養教諭からの働きかけで内容を検討することが多かったが、回を重ねるごとに役員自身による企画が充実し、内容も生活に密着したものとなっていった。



(2) 食に関するアンケート調査、子どもの実態や食に関する課題の把握、分析、課題解決のための方途を明確にし、家庭との連携に生かす。

学校と家庭との連携による食に関する指導の調査として、5月に町内小中学校の子どもと保護者を対象に、10項目によるアンケートを実施した。結果から、次のことが明らかになった。川辺町では、朝食を毎日食べないで登校する子どもは少ない。しかし、週に数回食べないときがある子どもが、学年が上がるにつれて多くなることや、朝食内容に偏りが見られ、保護者が副食を準備しているにもかかわらず主食しか食べていない傾向にあることが分かった。そこで、保護者に朝食内容の充実を啓発すると同時に、子どもがしっかりと朝食を食べることの大切さを実感する必要があるととらえて指導の改善にあたることができた。

テーマ3 学校と地域との連携による食に関する指導の充実のための取組

(1) 地域の生産者や食生活改善協議会等の地域の方々を講師に招き、作物の栽培指導（支援）、交流会、「食」に関わる体験活動の機会を設定する。

学校内の農園や地域の農地を借用し、栽培活動を実施している。生活科や理科、社会科、総合的な学習の時間で、各学年が何を栽培するのかを明らかにし、農園の割り当てを行った。観察を繰り返し、収穫したもののについては、試食したり調理の食材にしたりして味わう活動を行った。

川辺西小学校3年生は、総合的な学習の時間に、しいたけ農園を経営されている地域の方から指導を受けて、しいたけ栽培について学んでいる。菌を植えたほだ木を「天地返し」する作業を行った。この後、のこぎりで木を切って菌の成長具合を観察し、しいたけ園の周囲の除草作業を行った。

川辺北小学校の1年生と2年生の生活科や、3年生の総合的な学習では、地域の農業に携わるおじいさんやおばあさん、地域の方々に教えていただきながら、野菜や大豆の育て方を学習している。3年生は、収穫した大豆を使って、2月に「きな粉づくり」を行った。

町内の各小学校では、全校で「食」に関わる体験活動を学年の発達段階に応じて、学級活動や総合的な学習の時間などに関連付けて行っている。

(2) 収穫した農作物を使って収穫祭等を開催し、家族、地域住民を招待し、一緒に調理、会食をし、地域の食文化への関心や自然の恵みへの感謝の気持ちを高めるとともに、地域住民との交流を図る。

川辺北小学校の1年生と2年生では、収穫した野菜を使った「サラダパーティー」を開いた。お世話になった方々を招待し、お礼の会を行った。

地域の方々と一緒に会食をする中で、子どもたちから作物の世話や収穫した野菜について話しかける姿が多くみられた。また、参加いただいた地域の方々からは、地域の特産物について話していただき、会食を通して野菜の話題が広がった。

その他の学年も収穫した農作物を使って収穫祭等を開催し、家族や地域の方々を招待して一緒に調理したり会食をしたりして、食を通じた会話がはずみ、楽しく交流を行うことができた。

地域の食文化への関心や自然の恵みへの感謝の気持ちを高めるためのよい機会となった。



テーマ1～3に共通する具体的計画

(1) 先進地視察（神戸町下宮小学校）から

食育に関する授業を計画的に実施することや保護者に公開すること、家庭との連携においてワークシートや見届けカードに保護者からの励ましを書く欄を設けたこと、家庭教育学級での食育に関する研修に保護者が積極的に参加したこと、町として組織的に実践を積み上げたこと等の具体的な方策により、家庭における食への関心が高まり、各家庭で望ましい食習慣や生活習慣を身に付ける取組が始まったことを学ぶことができた。

(2) アンケート集計の結果から

5月のアンケート結果から、朝食はほとんどの児童生徒が食べていることが明らかとなった。しかし、1週間のうちに1日でも朝食を食べない児童生徒は、学年が上がるにつれて少しずつ多くなり、中学校女子で1割以上いる。食べない理由として、「時間がない」「食欲がない」と答える児童生徒が多く、土日は朝起きるのが遅く、食欲がなかったり、朝昼兼用で食べたりしていることが挙げられた。朝食の問題と共に、生活習慣全般にも問題が見られた。朝食の内容については、主食をほとんど毎日食べている児童生徒が9割以上いるのに対して、おかずを毎日食べている児童生徒は約4割しかいなかった。また、保護者が副食を準備しているのにもかかわらず、主食しか食べていない傾向にあることも分かった。11月に再度調査を実施し、これまでの食に関する指導と実践によって、子どもがしっかりと朝食を食べることの大切さを感じたことと、保護者に朝食内容の充実を啓発したことの成果を結果から検証する。

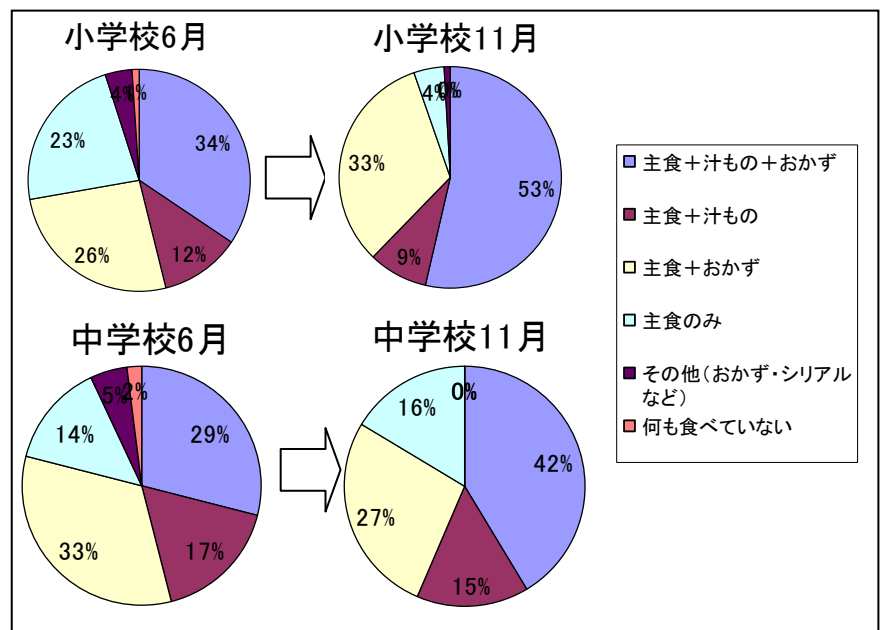
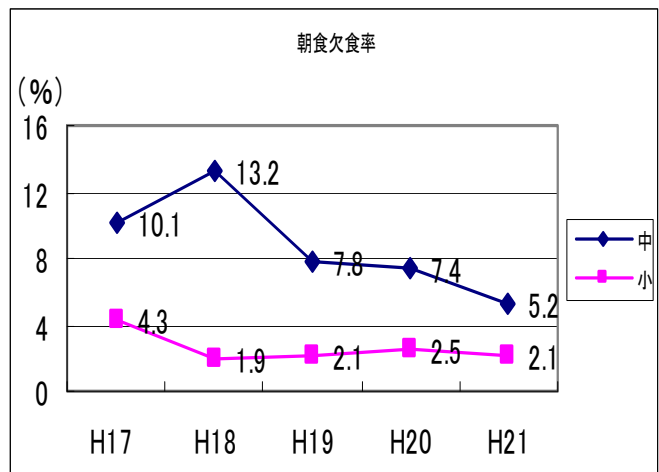
数字で変化のあった事項について

アンケートを実施した5月は朝食内容が不十分だったが、後半で充実してきた家庭もあり、この調査を通して意識の高まりが見られた。また、朝食を大切にしている家庭の生の声も聞くことができた。

しかし、朝食欠食はゼロではなく当初の目標が達成できなかった。継続的な指導の結果、中学生の朝食欠食率は年々下がってきている。小学校においては、昨年度より今年度は欠食率が下がっているもののほんのわずかな減少である。朝食欠食ゼロを目指し、朝食を必ず食べる子を育てるという課題を克服する難しさを感じた。今後も取組を続けていくことの大切さを感じた。

また、食事内容の変化についての結果は、右のグラフのとおりである。朝食内容を、今年度5月の調査結果と比較すると、11月では汁ものとおかずのある朝食を食べる割合が増えた。家庭の理解や協力もあり、食事内容の向上が見られた。

今後、朝食を食べてきていない子どもにいかに関心を持って指導して食事内容を充実させていくか、また、家庭への更なる啓発をどのようにしていくかが課題である。学校では指導内容や方法の工夫を続け、また、地域家庭へ今後も継続的に働きかけを行い、朝食欠食ゼロを目指していきたい。



事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

(1) テーマ1から

栄養教諭の効果的な授業への参画を始め、学校教育活動全体を通して食に関する指導を推進する方途を明確にすることができた。各教科や特別活動等における指導により、子どもが主体的に自らの食生活について考えようとする姿が具現できた。その一例として、特に朝食やおやつとり方について、各学年の指導の観点を明らかにすることで、子どもたちが食生活全体を見直すことにつながった。さらに、バランスのよい食生活をめざし、生活習慣について考えようとするなどの子どもたちの主体的な姿の変容がみられた。



(2) テーマ2から

栄養教諭を中核とした学校からの様々な働きかけにより、家庭における食育への関心が高まり、各家庭でよりよい食生活をめざした新しい取組が始まった。特に、食に関わるアンケートの分析をもとにした課題の明確化や指導の具体化により、子どもや保護者に必然性のある情報提供や啓発を行うことができた。また、家庭での取組を通して、子どもと保護者の心温まる関係が醸成されつつある。



(3) テーマ3から

栄養教諭がコーディネーターとなって地域との連携を図ったことで、学校と生産者の方々との交流が深まり、子どもたちの地域の食文化への関心や、自然の恵みに感謝して食べようとする姿勢が高まってきた。

また、地域生産者のゲストティーチャー的な食育への参画にとどまらず、地域から多くの方々が積極的に授業に参加していただいたことで、子どもからも主体的に働きかけていく、双方向性のある交流ができた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

(1) 小・中9年間を見通した系統的な指導計画の作成と、食に関する指導内容の明確化

栄養教諭の食に関する豊かな知識を生かして、指導内容を見直したり修正したりしながら、川辺町の食に関する指導をさらに充実させる。

(2) マナーや感謝の気持ちを大切にしたい、栄養教諭と学級担任による給食の時間の指導の充実

児童が食に関する知識をいくら身に付けても、そこに、「そうか!」「わかった!」「ありがとう!」という実感のある感動や感謝の『心』が伴わなければ、自分自身の生活に生かすことができない。栄養教諭や給食の調理員、地域の生産者の方々とのふれあいを一層充実させ、給食の時間の指導を通して、マナーや感謝の気持ちを大切にしたい心の耕しに引き続き取り組む。

(3) 個に応じた指導の充実を図る

川辺町の児童生徒の食生活は、改善されてきてはいるものの、まだまだ取組の余地がある。食に関する指導は、生活習慣の指導でもあるので、学級担任と養護教諭、保護者と協力し、児童生徒一人一人に積極的に働きかけていくことが必要である。

(4) 家庭・地域への一層の啓発と、学校と協同行う事業等の連携

学校と給食センターからの情報発信を今まで以上に行うとともに、各家庭の日常生活において取り組む内容を呼びかける。また、地域の行事に親子で調理実習を体験する機会を設け、栄養教諭が講師として参加し、地域の食育推進のリーダーとしての役割を果たせるようにする。